

「ガバナンスと価値創造」をテーマにWICIシンポジウム2019

2019.11.27

知的資産経営の実践や情報開示のツールや学びの場を提供しているWICIジャパンは、2019年11月24日（日）、「見えない資産の時代におけるガバナンスと価値創造のあり方～これからの統合報告～」と題したシンポジウム（後援 経済産業省、IIRC、CFO協会）を開催した。約200人が参加したこのシンポジウムでは、今年で7回目となるWICIジャパン統合報告開示優良企業の表彰式も行い、大賞には日本精工株式会社が選ばれた。

今回のシンポジウムのテーマである「ガバナンス」を踏まえた基調講演では、株式会社神戸製鋼所で社外取締役、取締役会議長を務めている北畑隆生氏が登壇し、同社におけるガバナンス改革の現状を取締役会の進行の仕方など具体例を挙げながら紹介するとともに、日本企業全体のガバナンスの課題の1つとして、日本におけるコーポレートガバナンス・コードのComply率の高さを挙げた。「英国では5割程度にとどまっており、日本のComply率の高さは異常に近い。Complyしておけば説明する必要がないことからすると、積極的なExplainを評価していくことも大事」と強調した。

午後の部で行われたWICIジャパン統合報告開示優良企業の表彰式では、審査委員長の松島 憲之氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社チーフアドバイザー）から、最近のレポートのレベル向上は目覚ましく、過去～現在～未来を結び付けながら持続的成長をCEOメッセージで強烈に語っているレポートが増えている点に触れ、「メッセージは時間のない投資家が最低限ここだけは読むという重要なコンテンツであり、大賞となった日本精工のレポートは、熱意が伝わってくるCEOメッセージだった」。また、資本コストやROICなどの概念を用い、全体の財務戦略をしっかりと語り、その背景にある非財務情報をストーリー立てて解説した読みや

すいレポートも増えている、と語った。また、同じく審査を務めた本多淳（WICIジャパン上席研究員）からは同社のレポートについて、内容の重複感を避け非常に整理されたConcise（完結なレポートであるとともに、巻末にIR担当の取締役からレポートの誠実性の確保に向けた表明がある点を評価した。

また、「ガバナンス」を一貫としたメインテーマとして、様々な切り口を加えた5つのセッションが行われた。「試されるアナリストの目利き力」と題したセッションでは、モデレーターの佐藤明氏（株式会社バリュークリエイト パートナー）から、長期的な視点から業界や企業を分析した優秀なアナリストレポートを評価するベシック・レポートアワードを紹介。その受賞アナリストや長期投資家、上場企業の社外取締役らをパネルに、投資サイドにおけるガバナンス評価のポイント等が語られた。

シンポジウムでは、「ガバナンス」という言葉がもつあいまいさとその日本語訳である「企業統治」がもたらす誤解に着目し、より相応しい表現を考える「ガバナンス総選挙」を実施した。参加申込者から事前に集め事務局で絞り込んだ候補として、「指揮監督システム」「舵取り」「羽交い絞めと後押し、時々、伴走」「企業協奏」の4つが紹介され、投票の結果「舵取り」が選ばれた。